

二重竹小舞

2009年12月
～2010年1月

翌年(2010年)1月に顧問・小清水漸先生の退任記念展に合わせて、つちのいえも公開されるので、下から上がって来ると正面に見える北側の土壁(北壁)をつくることを優先させた。

北壁は竹小舞を用いる土塗壁にするが、竹小舞は二重にすることにした。通常の土塗壁では一重だが、ここでは貫代わりに二重に回した竹の内側と外側から小舞を搔く。柱を隠し、かつ丸い土壁に強度と分厚さを与えるためである。

この二重竹小舞は、柱を隠し、分厚い曲面壁をつくるので、外見が無垢の土壁に見える。製材された木材を使わないことから導いた独自の工夫であり、構造=意匠である。土は二枚の小舞の隙間で乾く。竹籠のような仕組みなので、窓の位置も自由になる。窓枠の内側もしっかり土を塗り込めば、壁は空洞のない分厚い土壁に見える。

「竹小舞の壁にどんな感じに窓をあけるか考えたりするとワクワクしますね!外から版築がみえるようにしたいな。早く土を塗りたいですね」(是永麻貴_ブログから 2009/12/17)





峠の茶屋で土がはがれることがあったので、今回は絶対に土落ちしないやり方を工夫した。

- (1) 竹木舞の間隔は3~4cmと密に
- (2) 竹の一本一本にシュロ縄を4~5cmほどの間隔でしっかり巻き付ける。
- (3) ワラ縄でつくった独自のヒゲゴ*を随所につける。

*ヒゲゴとは、釘に麻の繊維を結び付けたもので、柱の縁に打ちつけ、繊維を壁側に広げて土を塗ることで、土落ちや土の乾燥によるすき間を防ぐ左官用品。下の写真は独自の縄ヒゲゴ。



窓枠 小さく丸い窓は銃眼にも見える



厳寒のなか、温かい食事が癒やになる。



土塗り (1)

2010年1月

2010年1月14日、竹小舞への土塗り作業を始めた。

土は竹林の土で、粘土質の赤土である (→p.12)。通常は、雨に濡れることを避けるため、土塗りは屋根ができたあと内側から行う。まったく逆の進め方だが、土を塗りたい衝動に身を委ねた。

1_フルイで土を均質にする



2



4



2_数センチに切ったワラスサを混ぜて足で練る。ワラスサは土の強度を増し、ひび割れを防ぐ

3_ブルーシートごとまくり上げて練る

4_さらに足で練る

5_ワラスサの混ざった土の状態



5

6_初めての左官。シュロ縄を巻いた竹小舞に土を練り込むように塗る



6



7



8



9

7_土練り班と土塗り班の共同作業

8_縄ヒゲゴを広げて土塗を進める

9_窓の位置は検討を重ねた。窓枠にもできるだけ縄を巻き、分厚い壁に穴が空いたように見せかける。

10_外側の8割が塗り終わった状態



10 2010年1月14日の状態

北壁の土塗り作業は、一層目の荒塗を終えた段階でいったん休止した。「小清水漸教授退任記念展」(2010年1月21日～30日)の一部になるからである。

1月20日、版築壁を覆っていた板囲いを取り除き、屋根をつけてお披露目とした。北壁は、外側が縄ヒゲコも見える土塗り状態で、内側は土塗も未着手、二重竹木舞がむき出しでわかる状態。南壁は、練り土積みを下から二段だけ施した状態である。

退任記念展の会期中、美術評論家の中原佑介氏が、小清水先生の案内でつちのいへにも上って来られた。(中原氏は2011年逝去)



小清水教授退任記念展の看板類。うしろが和船。



小清水先生は京都芸大にほど近い桂坂に別荘を持っておられ、囲炉裏の間で、たびたび集いを開かせていただいた。

学生の顔ぶれは変わるが、この小清水邸での囲炉裏会はその後も時節ごとに開催された。

(右は2009年12月23日の囲炉裏会)





2本の大黒柱

2010年4月～6月

2010年春、小清水先生は退任されたが、秋山陽(陶磁器)、長谷川直人(陶磁器)、栗本夏樹(漆工)の先生方が参加下さり、井上明彦(造形計画)含めて4人の教員、参加学生も15名近くに増えて、「つちのいえ」新学期が始まった。

取りかかったのは、土壁塗りの続きと屋根づくり、そして「峠の茶屋」の解体(p.26-27)と大藪家からの土の救出であった。

屋根は円錐形なので、版築柱に埋め込んだ自然木の大黒柱から竹の梁を放射状に渡す仕組みが、家のかたちと構造の決め手になる。中心になる梁の交叉部分の処理がむずかしかった。



壁の内側も、外側と同じように、縄ヒゲコをつけ、ワラを混ぜて練った赤土を塗り込んでいった。

屋根にはとりあえずブルーシートをかけて雨をしのいだ。



角材で五角形に組んだ構造体を大黒柱に取り付け、8本の竹の梁を受ける。

春爛漫。

見上げると満開の桜。

つちのいえの丘は、芸大随一の隠れた桜の名所だった。

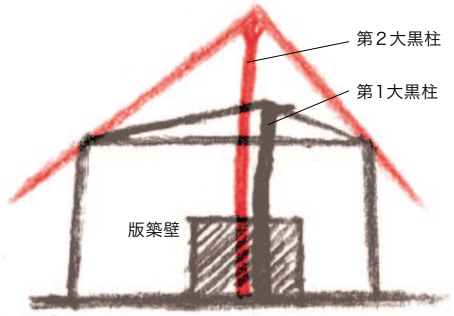
広葉樹の落葉は、茅葺き屋根にはよくないのだが。



土壁は雨に弱く、濡れると土落ちてしまう。土は何度でも塗直せるとはいえ、早く屋根をかけることが望まれた。



2010/5/20



大黒柱に梁を渡したとき、まだ屋根材は決まっていなかった。学生に希望を尋ねると、ワラ葺き屋根にしたいという。だが、ワラ屋根を葺いた経験のある者は誰もいない。わかっていることは、ワラ葺きは水はけが大事で、そのためには傾斜がゆるすぎるのだ。まず大黒柱を高くする必要があった。

それでまたも大五さんから、先が二股に分れた長く丈夫な雑木をいただいた。それを大黒柱の横に立て、第二の大黒柱とした。竹の梁が一点に集中するのを避けるため、二股のあいだに80cmほどの短い丸木を渡し、それで梁を受けるようにした。



しかし、屋根を葺くための大量のワラを入手できるのは秋の収穫後。当面はブルーシートで雨をしのいだ。



第二の大黒柱の頂点に造作をほどこす長谷川直人教授。以後、抜群のセンスと技術力を持つ長谷川先生にさまざまな面で助けられる。

